

この春、二高に入ったことをきっかけに、今まで漠然としか考えていなかった将来について考えることが多くなった。私は、自分の具体的な将来像や明確な目標をまだ持っていないのが正直なところだ。自分の進路を決めていくためにも、経験を増やすためにも、日本有数の大企業や日本一の大学というのを見てみたいと思い、本行事に参加することにした。

初日は、企業大学訪問という一生に一度しかないであろう機会に恵まれた。

まず、新日鐵住金株式会社では、製鉄業について、その重要性を知ることができた。「製鉄」というと、明治時代の産業革命のような古いイメージがあったが、実際は現代でも重要で、なおかつニーズのある業種であることを知った。また、大企業とは多くの部門から成り立っていて、それら全てが会社の業績や株価に直結する、部門の一つひとつ、そして社員一人ひとりの能力と責任が強く問われる職場なのだということが分かった。また、二高のOBの方々は「文武一道」の精神を体現し、運動系の部活を一生懸命がんばられていたとそうだ。この話を聞いて、実力社会で勝ち上がっていくためには、学歴や教養だけでなく、「人間力」や「総合力」が必要であり、部活動はそれらを高めることのできる絶好のチャンスなのだろうと考えた。私は文化部だが、部活動をはじめ高校生のときにしかできない経験を積み重ね、社会に出る為の「人間力」や「総合力」を養っていきたく思った。

また、グループディスカッションを通して、高校生活が自分の人生に与える影響の大きさについて深く考えを巡らすことができた。特に私は、ディレクトフォースの方の「迷ったらまずはチャレンジする精神が大切だ」という話が一番心に残っている。自分を省みると、私は何かの選択に迷ったとき、自信が無くてどうしても引っ込み思案になってしまい、やらない方を選んでしまうこともある。これからは積極的・能動的に行動していけるように、いつも気を付け、失敗や後悔を恐れないスタンスでいこうと決めた。

そしてその後、帝京大学 EBM センターという研究所に行った。EBM というのは「根拠(エビデンス)に基づいた医療」という意味で、今現在使用されている治療法や薬が本当に効いているか確かめる研究のことを指している。今回私たちは、研究所長の矢野栄二教授に話を伺うことができた。EBM の E とは、experience(経験)の E でも expert(専門家)の E でもない。つまり、医者の方のこれまでの経験に裏打ちされているから良しとはせず、「その治療法や薬が本当に効いたのだ」という根拠(エビデンス)が必要だという話が印象深かった。言われてみれば当たり前のように感じるが、この概念が提唱され始めたのは 1990 年代と比較的最近のことである。このことに驚いたが、当たり前を感じてしまうからこそ、大切さを認識するのが遅れてしまったのだろうと思った。また、今まであまり見識が無かった公衆衛生学についての話もたくさん聞くことができた。教授とお話できたのは一時間ほどだったが、将来医療に携わる道を視野に入れている私にとって、とても有意義な時間となった。

そして夜に、二高のOB・OGで東京大学を始めとする東京にある大学・大学院に通っている先輩方との懇談会が催された。東京大学に通っているなんて別次元の人に違いない、とばかり思っていたが、先輩方の話はリアリティを感じるものばかりで、私の先入観は覆された。とても楽しそうに高校での思い出や今の大学生活について話していた先輩方の姿が忘れがたい。新日鐵住金、そして懇談会と、多くの素晴らしい先輩方と出会え、二高生であることの自覚と誇りを新たにしたい一日だった。

二日目は、東京大学のオープンキャンパスに行った。日本一の大学とはどんなところなのか、そこに通う学生はどんな人たちなのか、とても興味深く思い想像ばかりが膨らんでいた。初めて生で見た赤門は、ひときわ特別

な存在に感じられた。そしてキャンパス内の建物は、歴史を感じさせるものと近代的なものが同居していた。キャンパスツアーに参加し、文化財に指定されている建物もあるという話を聞いた。ここだけは、東京の都会の忙しなさとは隔絶された空間のようで、不思議な感じがした。

私は時間を目一杯に使い、できるだけ多くの企画に参加した。私が最も印象に残ったのは、理学部の研究展示だ。私は地学に興味があるので、地球惑星物理学科・地球惑星環境学科と天文学科の展示を見に行った。それぞれのブースで、学生さんが丁寧に分かりやすく研究内容の説明をしてくれた。東大生と話すことへの緊張感は依然として抱いていたが、フレンドリーで気さくな学生の方々が多く、気張らずに会話することができた。私が地学部に所属しているのだと話すと、より目を輝かせて研究の話をしてくる学生の方々が強く記憶に残っている。また、教授の方にも研究の説明をして頂けた。ニュースで見聞きした研究がいくつもあって、東京大学の研究水準の高さを肌で感じ取ることができた。とても充実した時間を過ごすことができた。

また、サークル紹介コーナーでのフリートークも、私にとって良い刺激になった。私は管弦楽団の方と話をした。中学生のとき管弦楽団に入っていた私は、大学生になったら管弦楽をまたしたいと思っているからだ。東京大学の管弦楽団は、N響など一流のプロの方々に教えてもらえているということ、毎年全国公演をすることなどを知った。学生オケとは思えない大規模な活動をしているということに驚いた。東京大学で、学問もサークルもハイレベルに行われているということは、二高の「文武一道」に通ずると思った。団員の方には、勉強についてのアドバイスも頂けて、非常に参考になった。中高一貫校でなくても焦らずに、今やっていることをしっかり身に付けていけば大丈夫、と言われ、これからは勉強をがんばっていこう、と改めて思い、自分を鼓舞することができた。

この二日間はあっという間に過ぎた。とても濃密で有意義な時間を過ごすことができた。

私は中学生のときから、地元だから、という理由で、東北大学に行きたいと考えていた。しかし、本行事を通して、「地元」などといった考えだけではなく、自分が本当に行きたい大学、学びたい学問を見つけて、それを目指すことが大切なのだと気付いた。高1の今は、様々な選択肢をテーブルに並べ、吟味し、その中で自分の歩むべき道を探して絞っていくことが必要な時期だと思う。今年の夏は東北大学と東京大学のオープンキャンパスしか行かなかったが、これからは少しでも興味のある大学のオープンキャンパスや学園祭・文化祭へ積極的に足を伸ばし、自分にとって最適・最善の進路選択ができるようにしたい。そして、自分の可能性を狭めないためにも、怠けずに今からしっかりと勉学に励もうと決意を新たにした。

また、企業大学訪問のアポイントメントをとったり、ディレクトフォースの質問を考えたりといった東京に行くまでの準備は大変だったが、この行事ではないと経験できなかったと思う。特に帝京大学 EBM センターにアポイントメントをとるための電話をかけるときは、断られたらどうしようという不安、そして緊張で一杯だった。帝京大学の方から了承を頂けたときは、ほっとすると同時にとても嬉しかった。先生方には、社会に出ていく前にこのような経験の機会を与えて頂けたことに感謝したい。

二日間で得ることができた多くの収穫を無駄にせず、進路選択以外のこれからの実生活にも還元していきたい。本当に価値のある二日間だった。